



## チームで取り組む糖尿病治療・看護

糖尿病看護認定看護師 6S病棟副主任 中村 彰子



糖尿病は、生活習慣と深く関わる慢性疾患の1つであり、生涯に渡る治療を余儀なくされます。

当院では、1981(昭和56)年から糖尿病患者会「つばき会」を通して糖尿病に関する啓蒙活動を行ってまいりました。

現在は、医師を中心に看護師、管理栄養士、理学

療養士、臨床検査技師、臨床心理士によるチームを設置し、患者さんやご家族の支援に取り組んでいます。

糖尿病は医療チームの関わりが重要であり、栄養士の食事指導、理学療法士が指導する運動プログラム、薬剤師の服薬指導、看護師から血糖値の基礎知識やフットケアの自己管理などの指導を受け、習得したセルフケアの実践を目指しています。

今後は糖尿病看護認定看護師の資格を活かし、チーム活動をより活性化させたいと考えます。

外来・病棟を問わず、ライフステージや合併症の病期に応じた生活調整・療養支援を多職種が担い、一人一人がその人らしい療養生活を送ることを、患者さんやご家族と一緒に考え、支援できるよう努めてまいります。



## 皮膚・排泄ケア認定看護師としての当院での役割

皮膚・排泄ケア認定看護師

(WOC: Wound, Ostomy and Continence Nursing) 庭瀬 茜



近年、超高齢化社会に突入し、医療依存度の高い入院患者さんが増えています。

皮膚・排泄ケア分野は、ストーマ造設や褥瘡などの創傷処置、手術や筋力低下に関連する失禁をきたす患者さんを様々な側面から捉え、その中で専門性の高い知識・技術を活かしながら介入することが求められます。

当院では、人工肛門を造設した患者さんの退院後も、定期的に通院して頂くストーマ外来を設けており、継続的なケアの提供が出来るよう取り組んでいます。

また、院内褥瘡発生患者のラウンドを行い、ケアの方法や処置について検討し介入しています。

これからの医療は、「治す医療」から「支える医療」へと変化しており、入院から在宅へ移行する転換期となっています。そのため、「入院」の限られた期間だけではなく、退院後の在宅医療へ移行した患者さんにも視点を置き、活動することが重要といえます。

創傷・排泄管理でトラブルを抱えた患者さんが、在宅であっても安心して治療を継続できるように、当院の訪問看護課や地域医療関連施設と連携を図り、積極的に介入ができるよう取り組んでいきたいと思っております。

